

国宝松浦屏風の制作年代とその制作の指導者について

成瀬 不二雄

目次

- はじめに
- 一 松浦屏風の小袖の身幅と袖幅との比率及び染織技術について
- 二 衣服の形態の特徴について
- 三 松浦屏風についての矢代幸雄先生の意見
- 四 平戸の地と日本近世初期の南蛮趣味
- 五 松浦静山公と松浦屏風
- むすび

はじめに

松浦屏風と呼ばれる紙本金地着色風俗図(図1)は、現在奈良市・大和文華館に所蔵され、国宝に指定されている。この六曲一双の屏風絵は長崎県・平戸の大名、松浦家所蔵なので、この名で呼ば

れている。しかし、後に述べるように松浦家の記録では、この屏風絵はその制作年代と考えられてきた近世初期から、平戸にあったのではなく、松浦氏三十四世の清(号静山、一七六〇〜一八四一)が京都で入手したもので、当時は岩佐又兵衛作と言われてきた。もっとも、この作者についての伝承は、時代の古い風俗画について必ず取り上げられるもので、敢えて信ずるには及ばない。現在の所有者の大和文華館では、『婦女遊楽図屏風』と公称している。

この屏風絵は総金地の大画面に、十八人もの婦女をあるいは立像として、あるいは坐像として配列しており、こういう等身大に近い人物群像の描写は、他の日本の風俗画に例がない。そして、中国に始まる琴棋書画の画題に従って、三味線、双六盤、筆と硯、カルタ遊びなどを配し、キセル、柄鏡を婦女に持たせているが、風俗の表現よりも服飾に重点を置き、むしろ流行衣裳の展示会といった雰囲気を示している。

こういう性質を示しているため、この屏風絵は小袖模様を描く画工職の作と見る説が、かつては有力だった。ところが、最近の染織

史の専門家によると、この屏風絵の小袖や打掛うちかけの描写には、専門の職人の手になったとは思えない誤まりが多いとのことである。そして、その制作年代もある者は桃山時代の慶長年間（十六世紀～十七世紀初頭）と言い、ある者は江戸時代の寛永年間（一七三〇年代）に下ると評し、国宝に指定されている絵画なのに、はつきりその制作年代を明らかにすることを避ける傾向があった。ちなみに、美術作品の鑑定について正しい意見を出すことのある骨董商の間では、この屏風絵について、「あれは若い」という意見がささやかれていた。これは業界用語で、風俗画としては時代が下るという意味だと考えられる。

松浦屏風の制作年代について、最も断定的な意見を出されたのは、かつての文化財専門委員として重きをなした故矢代幸雄先生（一九〇〇～一九七五）である。先生は松浦屏風を日本近世初期風俗画の代表的名品とされ、それは風俗画の栄えた桃山時代の慶長年間の作だと主張されていた。先生は関西の私鉄の代表、近畿日本鉄道から日本、中国、朝鮮半島などの美術品の蒐集を委託され、後に近鉄が設立した奈良市・大和文華館の初代館長になられた。

元来、矢代幸雄先生は欧米に留学し、英国においてサンドロ・ボッティチェリボッティチェリの評伝を英文で出版された西洋美術史の権威だったが、帰国後は文部省美術研究所（現、東京文化財研究所）の所長となつて、日本など東洋美術の研究を主とされた。先生は国際都市の横浜に生まれ、特に英語を得意とされたため、その西洋美術の知識はやや英語の文献と英米の学者の研究とに偏する傾向はあったが、

東西の美術について広い視野を持たれて、日本美術についても従来の研究者には欠けていた視点から評論をされたのである。

矢代先生は既に松浦家から出て、京都の美術商の所有となつていた松浦屏風を購入して、大和文華館の代表的な所蔵品とされた。この屏風絵は風俗画の場となる背景がなく、総金地に十八人の華やかな衣裳を身に付けた女性たちを配置しているが、矢代先生はとりわけこれを愛好された。それは通常の日本の風俗画には見られない大型の人物群像なので、元来西洋美術史の専門家だった先生の注意を引いたのだろう。しかし、早くから国宝に指定されているこの屏風絵は、果たしてそれに値する人物群像の名品なのだろうか。

筆者がかつて大和文華館に勤務していたとき、松浦屏風は日本近世初期風俗画の名品とされる彦根屏風と対比して、論評されることが多かった。後者は滋賀県の彦根の藩主井伊家に所蔵されてきたので、この通称がある。この両者はともに戸外を背景としないで、室内だけを描く金地の人物群像である。また、両者ともに女性の服装に重点を置き、琴棋書画きんきしよがにちなむ構成をとっているので、比較するのに便利だった。しかし、狡智こつちに過ぎるとまで評される彦根屏風の洗練された技巧に対し、松浦屏風は余りにも素っ気なく、しかも後に言うように、近世初期の風俗画としては、矛盾するところが多い。ちなみに、筆者の神戸大学文学部時代の恩師、小林太市郎博士などは、松浦屏風は贗物ではないかと、ひそかに語られることがあった。

